

ワンポイント・ブックレビュー

本田由紀 内藤朝雄 後藤和智著 『「ニート」って言うな!』 (光文社新書 2006年)

働かず、就学もせず、求職行動もとっていない若者はいま、ニートと呼ばれている。ニートについては既に多くの調査や研究が取り組まれ、行政やNPOによって様々な施策が取り組まれている。本書によればニートという言葉は2003年頃日本労働研究機構(現、労働政策研究・研修機構)の報告書などにぼつぼつと現れはじめたが、2004年の中頃になると日本中に広まり、「その(ニートの)急増が国を揺るがす危機」のような存在として叫ばれるようになった。本書は現在のニート論の潮流に疑問を投げかけている。

本書は、ニートそのものではなく、ニート“言説”への注意を促している。ニートという言葉が本来の定義を離れて、あらゆる“駄目なもの”を象徴する言葉として社会に蔓延しているのではないかと警告しているのだ。本書ではニート言説に危機感を抱く3人の著者が、「現実」、「構造」、「言説」の3部にわたってニート言説の問題点を提起している。

第1部の「現実」では、教育社会学者の本田由紀氏が統計データをもとに、ニートというイメージと現実のニートの量や質との間にずれがあることを指摘している。まず、量の点では、「若年失業者やフリーターの増加の仕方に比べれば、『ニート』の増え方ははるかに穏やかなもの」としている。次に、質の点では、ニートとされている人は就業を希望していない点は共通しているものの、その中には「進学・留学準備」、「資格取得」、「結婚準備中」などのために就業を希望していない人が多数含まれることが指摘されている。就業構造基本調査をもとにした推計では日本のニート人口は85万人と見積もられている。著者が危惧するとおり、この人数の“膨大さ”だけが先行している面は否めない。また、著者はニートをフリーターや失業者とともに、「同じような原因から生み出された同種で連続的な層」として捉えるべきと提起している。

第2部の「構造」では、社会学者の内藤朝雄氏が、ニート言説を青少年犯罪に端を発したマス・メディアによる「青少年ネガティブ・キャンペーン」との連続性のなかに捉えようとしている。ニートや青少年犯罪の問題では失業や非正規雇用の増加などの社会的原因には目が向けられず、ニートや青少年の心の問題とされやすい。そのために解決策には治療や矯正などの「教育」的手段が用いられやすい。著者はこれが「教育の名のもとに正当化される野蛮な教育=統治」となる危険性を警告している。

第3部の「言説」では、インターネット上のブログで青少年言説の検証に取り組んでいる後藤和智氏が、ニート論以前のパラサイト・シングル論と社会的ひきこもり論から週刊誌や投書欄にいたるまで、ニートがどのようなイメージをもって社会に流通していたかを検討している。

3人の著者が本書を通して訴えていることは、ニート言説のもつ危険性である。ニート言説は膨張すればするほど、雇用政策や企業のもつ問題が背景に追いやられ、若年雇用問題の個人的な側面だけがクローズアップされていく。「ニート」ブームに一石が投げられた(S.O.)